

「甘え」欲求と「甘え」による表出行動との関連性 —母子関係に着目して—

竹歳 彩乃¹⁾・田頭 穂積²⁾

Relations between the Desire for and the Behavior Caused by *Amae* : With Emphasis on their Links to Mother-child Relationship

Ayano TAKETOSHI¹⁾ AND Hozumi TAGASHIRA²⁾

要 約

本研究では、「甘え」における、「甘え」欲求と甘え欲求が満たされないときの「甘え」による表出行動との関連性について検討することを第1の目的とした。また、母子関係が、「甘え」欲求と「甘え」による表出行動に及ぼす影響に関する因果モデルの検討を第2の目的とした。女子大学生125名を対象に、それぞれの尺度について因子分析を行った。「甘え」欲求においては「屈折」「希求」「受容」の3因子、「甘え」による表出行動においては「とらわれ」「屈折」「不満」の3因子、また母子関係尺度においては、「一体化」と「許容」の2因子が抽出された。本研究の因果モデルにおいて、「甘え」欲求は「甘え」による表出行動と正の関連性が示された。また、親密な母子関係は「甘え」欲求を促進するが、「甘え」による表出行動には抑制効果を持つことが認められた。

キー・ワード：「甘え」欲求、「甘え」による表出行動、母子関係

1. 問題と目的

土居（1971）が日本人の人間関係に「甘え」という特徴的な心性があることを提唱して以来、「甘え」について数多くの議論がなされてきたが、現在でも「甘え」理論の検討が展開されている（谷，2000；河野，2007）。

土居（1971）によると、「甘え」は、“人間関係において密接な関係を保ち、安全を保障し、やさしく保護し、ほしいままにさせ、大切に世話し、愛情を注いでくれることを渴望する欲動であって、内的に構造化され強く表出されるもの”と定義されている。このような「甘え」の心理の発現には、依存と類似した「甘え」の欲求が基底に存在すると仮定されている。「甘え」の欲求が満たされるためには、相手がこちらの意図を察して、受け入れてくれるであろうと予測することが前提条件となる。したがって、甘えられるかどうかは、

相手の受け止め方いかんによるので、甘える側は「甘え」を受け入れてもらえないのではという不安を抱くこともある。

土居（1997）は、「甘え」には「素直な甘え」と「屈折した甘え」があると述べている。前者の「素直な甘え」は、発達心理学的に肯定的な意味をもち、「甘え」を通して人との信頼関係を築いていくうえで必要不可欠なものである。土居（1971）によると、「甘え」は、母との絶対的な依存関係にある生後4週から6週の乳児においても見られる現象であり、“人間存在に本来つきものの分離の事実を否定し、分離の痛みを止揚しようとする”ことであると述べている。これは、自分と母親とが別個の存在であることを認識しはじめたことを示す現象であり、どのように分離を捉えるかによって母子関係の表象は大きな影響を受けると考えられる。Wisdom（1987a, 1987b）も、早期の母子関係から生じる「取り入れによる同一化」が「甘え」と関連することを指摘している。後者の「屈折した甘え」は、甘えたくても甘えられない状況において「と

¹⁾ 広島文教女子大学大学院人間科学研究科教育学専攻

²⁾ 広島文教女子大学人間科学部初等教育学科

らわれ」の心理が発生し、「すねる」「うらむ」「ひがむ」などの歪んだ形で表出されることから臨床心理学的な意味を持つ。

これまでの「甘え」の実証的な研究を概観してみよう。藤原・黒川（1981）は、大学生における「甘え」についての調査研究を行った。彼らは「甘え」がどの対象に対して強く表出されるのか明らかにしようとした。「甘え」の欲求が最も表出されるのは、親子関係においてであろうという仮説を検証しようとしたが、家庭問題に関する状況では両親や兄弟姉妹に対してであり、個人生活の問題に関する状況では恋人や親友に対してであった。また、「甘え」の表出は、男子よりも女子に多く見られた。外山・高木（1991）の研究でも、女子が男子よりも「甘え」を肯定的にとらえており、「甘え」欲求も強いという結果を得ている。

藤原・黒川（1981）は「甘え」の次元尺度を作成したが、谷（2000）は、「甘え」の概念を多義的なものとして捉え、大学生を対象に「甘え」の構造について検討した。その結果、「直接的な甘え」「屈折的な甘え」「とらわれ」の3因子が抽出された。これらの因子は土居の「甘え」の概念に対応していると考えられたため、本研究では、谷（2000）の「甘え」尺度を採用することとした。

河野（2007）は、これまでの「甘え」の調査研究（藤原・黒川，1981；外山・高木，1991）を基に「甘え」の尺度を新たに作成し、大学生の「甘え」について研究を行った。彼は、「甘え」欲求が生起する刺激文を作成し、「甘え」欲求と、実際に「甘え」行動に至ると思うかという「甘え」行動思考などの尺度を設け、「甘え」欲求から「甘え」行動思考に至る「甘え」の因果モデルの検討を行った。

また、土居（1971）は、母子の基本的な信頼感を確立するには、「甘え」が必要不可欠であると述べている。山崎・杉村・竹尾（2002）は、日本人の対人関係の特徴である「内と外」の行動の使い分け（土居，1971）について触れ、親子関係は「遠慮がない身内の世界」である「内」に属するため、「甘え」の対人関係が形成されると述べている。また、彼らは、親子関係における「甘え」に着目した研究が少ないことから、「親子関係の親密さ」尺度を作成し「甘え」との関連性について検討している。

我々が一般的に「甘え」という言葉を使うときには、「甘え」欲求と「甘え」による表出行動を明確に区別して用いていない。谷（2000）の「甘え」尺度においても「甘え」欲求と「甘え」による表出行動の因子が

混在していることから、「甘え」欲求と「甘え」による表出行動を分離して検討する必要があると考えられる。したがって、本研究では、ふてくされたい、何とかしてほしい、受け入れてほしいなど、自分の欲求を自分以外の相手に満たしてもらいたいという欲求を「甘え」欲求と定義し、対象と関係を持ちたいのにその欲求が満たされないときに随伴する行動を「甘え」による表出行動と定義して用いることにする。また、これまでの「甘え」の実証的研究では、「甘え」によって表出された行動については、あまり検討されていない。

そこで本研究では、谷（2000）の「甘え」尺度を基に、「甘え」欲求と「甘え」による表出行動との関係を検討することを第1の目的とした。また、河野（2007）の「甘え」の因果モデルにおいては母子関係との関係について検討されていないので、母子関係、「甘え」欲求、「甘え」による表出行動から成る「甘え」の因果モデルを構成し、母子関係が「甘え」欲求と、「甘え」による表出行動に及ぼす影響について検討することを第2の目的とした。

2. 方法

対象者：広島県内の女子大学生（1～4年生）125名を対象とした。

調査用紙：本調査の質問紙は、3つの尺度から構成された。「甘え」欲求尺度は、土居（1970，1971，1994，1997）の「甘え」理論に基づいて作成された、谷（2000）の「甘え」尺度を修正して、「甘え」欲求と「甘え」による表出行動の尺度を作成した。母子関係尺度は、山崎他（2002）の「親子関係の親密さ」尺度の対象を母子関係に限定し、親密因子（7項目）と一体化因子（6項目）を修正して用いた。

手続き：調査用紙を授業時に配布し、無記名で集団実施し、記入後回収した。「甘え」欲求尺度と「甘え」による表出行動尺度は、「4：しばしば持つ」「3：時々持つ」「2：あまり持たない」「1：ほとんど持たない」の4件法であった。母子関係尺度は、「5：はい」「4：どちらかというとはい」「3：どちらともいえない」「2：どちらかというといいえ」「1：いいえ」の5件法で評定させた。

3. 結果と考察

尺度の因子構造

「甘え」欲求尺度18項目に対して、主因子法（Promax回転）による因子分析を行った。因子負荷量

Table 1 「甘え」欲求の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
「屈折」欲求 ($\alpha = .881$)				
すねたい。	.91	.06	-.01	.856
ふてくされたい。	.90	.04	.02	.839
ひねくれない。	.78	-.13	.13	.653
やけくそになりたい。	.68	-.04	.04	.466
人をうらやみたい。	.59	.13	-.12	.342
「希求」欲求 ($\alpha = .857$)				
人に何とかして欲しい。	.13	.88	-.17	.697
人をあてにしたい。	-.16	.80	.09	.669
人にすがりたい。	-.05	.78	.07	.656
何事も人にまかせたい。	.23	.64	-.06	.487
人に後押しをして欲しい。	-.07	.47	.29	.437
「受容」欲求 ($\alpha = .829$)				
どんな私でも受け入れてほしい。	.00	-.05	.75	.523
言わなくても人に自分のことをわかって欲しい。	.15	-.14	.75	.575
もっと誉めてほしい。	.03	.09	.64	.499
人に慰められたい。	-.07	.13	.59	.408
人に相談したい。	-.01	-.01	.55	.291
人に甘えたい。	-.03	.34	.50	.541
寄与率 (%)	35.30	14.32	6.25	
累積寄与率 (%)	35.30	49.62	55.87	

の小さい質問項目があったために2項目除外し、残りの16項目について再度因子分析を行ったところ、3因子が抽出された (Table 1)。各因子は以下のように解釈された。第1因子は「すねたい」「ふてくされたい」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「屈折」欲求の因子と命名した。第2因子は「人に何とかして欲しい」「人をあてにしたい」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「希求」欲求の因子と命名した。第3因子は「どんな私でも受け入れてほしい」「言わなくても人に自分のことを分かって欲しい」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「受容」欲求の因子と命名した。本研究の「甘え」欲求は、谷 (2000) の「甘え」尺度における「直接的甘え」因子に相当すると考えられるが、本研究では、「希求」と「受容」の因子に分離された。

次に、「甘え」による表出行動尺度24項目に対して、主因子法 (Promax回転) による因子分析を行った。因子負荷量の小さい質問項目があったために10項目除外した。残りの14項目について再度因子分析を行ったところ、3因子が抽出された (Table 2)。各因子は以下のように解釈された。第1因子は「何でもないことにわだかまりを持つ」「何でもないことにとらわれる」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「とらわれ」行動の因子と命名した。第2因子は「物事が自分の思い通りにならないとひねくれる」「自分が思った

通りにならないとすねる」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「屈折」行動の因子と命名した。第3因子は「物事がうまく行かないといらいらする」「ちょっとしたことでくやしい」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「不満」行動の因子と命名した。谷 (2000) の「甘え」尺度における「とらわれ」行動と「屈折」行動の因子は認められたが、本研究では、さらに「不満」行動の因子が抽出された。「甘え」による表出行動として「不満」行動が抽出されたことから、わだかまりを持つなどの「とらわれ」行動、すねる、ふてくされるなどの「屈折」行動が表出されるときに生起する感情の存在が確認されたと言えよう。「甘え」の定義に関して様々な議論が行われる理由の1つとしては、この概念に「甘え」欲求、「甘え」による表出行動、「甘え」に伴う感情などが内包され、錯綜していることが考えられる。今後も「甘え」の構成概念の検討が必要となろう。

母子関係尺度13項目に対して、主因子法 (Promax回転) による因子分析を行った。因子負荷量の小さい質問項目があったために2項目除外した。残りの11項目について再度因子分析を行ったところ、2因子が抽出された (Table 3)。各因子は以下のように解釈された。第1因子は「お母さんと私は好きなものが一致する」「お母さんと私の考えは似ている」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「一体化」の因子と命

Table 2 「甘え」による表出行動の因子分析結果

項目内容	F1	F2	F3	共通性
「とらわれ」行動 ($\alpha = .844$)				
私は、何でもないことにわだかまりを持つ。	.89	.02	.06	.826
私は、何でもないことにとられる。	.72	-.12	.10	.565
私は、ささいなことでも気を揉む。	.67	-.12	.07	.517
私は、いろいろなことに気おくれる。	.65	-.08	.02	.519
私は、ちょっとしたことでもこだわる。	.63	.25	-.26	.321
私は、ちょっとしたことでもひがむ。	.43	.10	.26	.475
「屈折」行動 ($\alpha = .861$)				
私は、物事が自分の思い通りにならないとひねくれる。	-.02	.84	-.07	.675
私は、自分が思った通りにならないとすねる。	-.01	.77	.14	.788
私は、ちょっとしたことでもふてくされる。	-.03	.61	.27	.696
私は、物事が自分の思い通りにならないと気がすまない。	.07	.44	.28	.424
「不満」行動 ($\alpha = .729$)				
私は、物事がうまく行かないといらいらす。	-.12	.29	.68	.615
私は、ちょっとしたことでくやしい。	.04	-.02	.67	.418
私は、嫌なことがあるとむかつく。	.02	-.02	.56	.334
私は、ささいなことでも人をうらむ。	.14	.14	.40	.399
寄与率 (%)	45.58	8.74	3.17	
累積寄与率 (%)	45.58	54.32	57.49	

Table 3 母子関係の因子分析結果

項目内容	F1	F2	共通性
「一体化」($\alpha = .895$)			
お母さんと私は好きなものが一致する。	.83	-.22	.489
お母さんと私の考えは似ている。	.76	-.18	.428
お母さんを尊重している。	.71	-.04	.467
お母さんとはお互いに刺激しあって人間性を高めている。	.69	.07	.556
お母さんと心がつながっている。	.63	.29	.724
お母さんと多くの時間を共有している。	.62	.03	.407
お母さんと喜び悲しみの感情を共にわかちあう。	.59	.29	.654
お母さんは欠点を含め、私のことを受け入れ許してくれる。	.54	.34	.657
「許容」($\alpha = .768$)			
お母さんは私の甘えを許してくれる。	-.23	.88	.554
私が何をしてもお母さんは最後に許してくれる。	-.08	.77	.517
お母さんが私の願望を満たしてくれる。	.13	.62	.509
寄与率 (%)	46.66	7.53	
累積寄与率 (%)	46.66	54.19	

名した。第2因子は「お母さんは私の甘えを許してくれる」「私が何をしてもお母さんは最後に許してくれる」などの項目が高い正の負荷量を示したので、「許容」の因子と命名した。山崎他(2002)の親子関係の親密さ尺度における「親密」と「甘え(一体化)」の因子項目を吟味してみると、それぞれの因子に「許容」と「甘え(一体化)」の項目が混在していたが、本研究では「一体化」と「許容」の因子に関する項目が明確に分離された。

「甘え」欲求および「甘え」による表出行動と母子関係との関連性

母子関係が「甘え」欲求と「甘え」による表出行動

に影響を及ぼし、「甘え」欲求が「甘え」による表出行動を生起させるという因果モデルを立て、Amos18.0の共分散構造分析を用いてモデルの検討を行った(Figure 1)。その結果、適合度指標は、GFI=.929, AGFI=.849, CFI=.921, RMSEA=.285, AIC=326.409であり、モデルの当てはまりはよいと考えられる。

Figure 1より、「甘え」欲求から「甘え」による表出行動へのパス係数は.88で有意($p < .001$)となったことから、「甘え」欲求が「甘え」による表出行動を規定するという仮説モデルが支持されたと言える。したがって、屈折、希求、受容などの「甘え」欲求が強

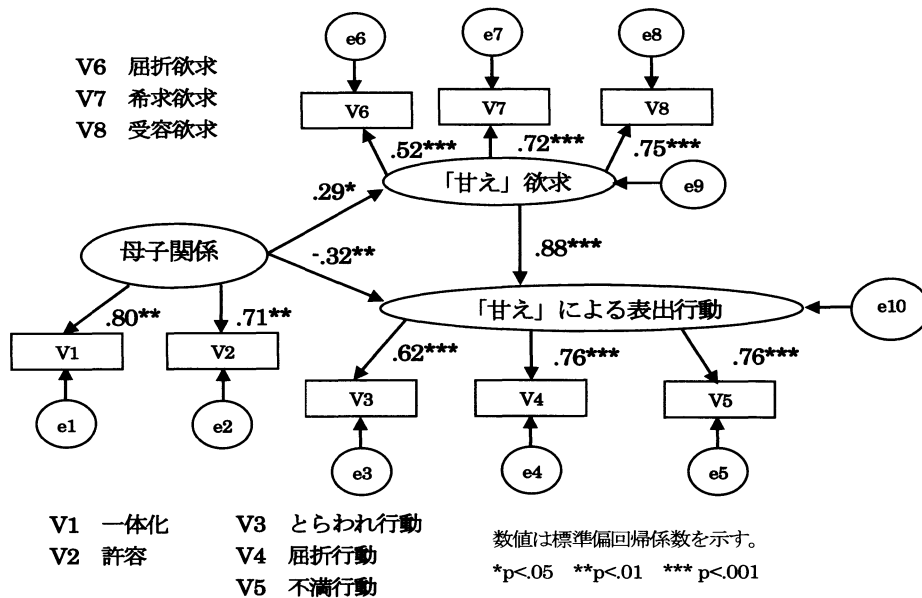


Figure 1 「甘え」と母子関係の因果モデル

い人は、とらわれ、屈折、不満などの「甘え」による行動を表出しやすいと言える。

次に、母子関係が「甘え」欲求と「甘え」による表出行動に及ぼす影響について検討する。母子関係から「甘え」欲求へのパス係数は、.29で有意 (p<.05) であったことから、親密な母子関係の人は、「素直な甘え」欲求を生起しやすいと言える。しかし、親密でない母子関係の人は、屈折した甘えとしての「こだわり」を持ち、“甘えたい気持ちは人一倍あるのだが、しかし相手に受け入れられないのではないかという恐怖があって、それを素直に表現できない (土居, 1971)”ことが考えられる。また、このような人は、自分自身が傷付かないようにするために「甘え」を回避したり、甘えようとする欲求を躊躇するといえよう。藤原・黒川 (1981) の結果では、母親への「甘え」の表出が多く見られなかったが、本研究では、母子関係が「甘え」欲求に影響を及ぼすことが認められた。その理由として、藤原・黒川 (1981) による「甘え」は、母子関係よりも仲間関係において表出されやすい状況設定がされていたためであろうと考えられる。

一方、母子関係から「甘え」による表出行動へのパス係数は、-.32で有意 (p<.01) となった。親密な母子関係の人は、「甘え」が満たされなくても屈折などの行動を抑制すると言える。その理由として、親密な母子関係の場合、甘やかせてもらえるという「素直な甘え」の経験により愛着が形成され、信頼関係に基づいた一体化が形作られているからであると考えられ

る。しかし、親密でなかったり過度に甘やかされる母子関係の場合、一体化の再現を求めようとするために、「甘え」が受け入れられなかったときに「屈折した甘え」などの行動が表出されると考えられる。

本研究では、「甘え」の対象を明確に設定していなかったため、今後は、母親を「甘え」の対象に限定してモデルを再検討する必要があるだろう。さらに、「甘え」の因果モデルを精緻化するためには、対象者における「甘え」の経験、母子間の「甘え・甘えられる」関係、「甘え」の受容期待と可能性などの変数を導入して、検討することが必要であると考えられる。

文献

土居健郎 1970 精神分析と精神病理 医学書院
 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
 土居健郎 1994 日常語の精神医学 弘文堂
 土居健郎 1997 「甘え」理論と精神分析療法 金剛出版
 藤原武弘・黒川正流 1981 対人関係における「甘え」についての実証的研究 実験社会心理学研究, 21, 53-62.
 ジョンソン F. A. 江口重幸・五木田 紳 (共訳) 1997 「甘え」と依存—精神分析的・人類学的研究— 弘文堂
 (Johnson, F. A. 1993 *Dependency and Japanese socialization: Psychoanalytic and anthropological investigation into Amae*. New York: University

- Press.)
- 河野清志 2007 大学生の甘えの心理に関する一考察
関西福祉科学大学紀要, **10**, 141-161.
- 熊倉伸宏 1993a 「甘え」理論と精神療法 岩崎学
術出版
- 熊倉伸宏 1993b 「甘え」理論と現代 児童心理,
48, 1689-1695.
- 小此木啓吾 1999 精神分析のおはなし 創元社
- 外山嘉奈子 1993 パーソナリティとしての「甘え」
児童心理, **48**, 1596-1602.
- 外山嘉奈子・高木秀明 1991 青年期の「甘え」に関
する一研究 —「困った」場面の分析を通して—
横浜国立大学教育紀要, **31**, 79-103.
- 玉瀬耕治・相原和雄 2004 大学生の「甘え」と特性
5因子の関係 教育実践総合センター研究紀要, **13**,
23-31.
- 玉瀬耕治・今村友美 2006 「甘え」と愛着 教育実
践総合センター研究紀要, **15**, 39-46.
- 谷 冬彦 1997 青年期における「甘え」の構造 相
模女子大学紀要, **63A**, 1-8.
- 山崎瑞紀・杉村和美・竹尾和子 2002 「親子関係の
親密さ」尺度の構成, 及び発達差の検討 —日本的
相互協調性の視点から— 日本青年心理学会第10回
大会発表論文集, 76-79.
- Wisdom, J. O. 1987a The concept of *amae*. *International
Review of Psycho-Analysis*, **14**, 263 - 264.
- Wisdom, J. O. 1987b Review of the anatomy of self.
International Review of Psycho-Analysis, **14**, 278 -
279.